

論文の和文要旨

| | |
|------|--------------------|
| 論文題目 | 日本語と韓国語の第三者敬語の対照研究 |
| 氏名 | 金順任 (キム スンイム) |

日本語と韓国語は文法構造が以て異なる上に、両言語共に複雑な敬語体系を持っている点でも類似している。敬語は日韓の共通する特色の一つとして、長い間さまざまな角度から研究されてきた。また、敬語というのは、尊敬・謙譲・丁寧の3種というラング面の抽象的体系だけで捉えきれものではなく、人間関係・社会関係における様々な敬語行動や敬語使用という観点も重要視しなければ、その本質は捉えきれない。そこで、社会言語学的観点からの研究の必要性が生じる。つまり、言語体系を明確に捉えようとする場合、その具体的な実態を明確につかむことが必要なのである。

敬語使用に影響を及ぼす要因としては、年齢、性別、方言、場面、社会的地位、話者の意図（自分の教養と品位維持など）、職業のような話し手自身と関わる要因や、親疎関係、発話時の心理的・感情的関係など、話し手と聞き手との関係に関わる要因などがあり、それら様々な要因が影響し合い、言葉が発せられるわけである。

しかし、実際の言葉運用においては、話し手や聞き手だけではなく、もう一人の人物、すなわち、話題に上る第三の人物が登場する場合もしばしばあり、このような場面になると、話し手は、上記のような要因だけで言葉使いを定めることはできず、話し手と第三者との関係及び、聞き手と第三者との関係も同時に考慮しなければならなくなる。つまり、2者間の会話より、より複雑な言葉の選択を迫られるのである。すなわち、聞き手に対する配慮や、第三者に対する配慮を同時に行わなければならないが、すぐさま、その状況を把握・判断するのは困難であるため、話し手は言葉使いに戸惑いを感じる場合が多くなる。

このような言語選択における「困難さ」は「言葉のゆれ」を生み出し、そのような「言葉のゆれ」が「言葉の変化」に繋がるわけである。言葉の変化は場合によっては、「乱れ」として感じられることもある。韓国語における絶対敬語、相対敬語の問題もまさに、今「進行中の変化」だと筆者は考えている。研究テーマを敢えて「現在進行中」または、「過渡期」にある言葉について絞った理由は、歴史的な変化の様相を把握し、現在の使用実態について明らかにし、それをきっかけに、これから敬語がどの方向に変化するかという予測が立てられると考えたからである。

また、第三者敬語の研究は、会話参加者間の人間関係の捉え方によって変わってくるもので、人と人との交流のためのコミュニケーションにおいても、非常に重要な論点になると考えられる。故に、筆者はアンケート調査や談話分析のような社会言語学的な手法を用い、日韓の第三者敬語のメカニズムを明らかにする。類似した両言語の共通点や相違点を明らかにすることにより、それぞれの言語を客観的な目でみることもできるだろう。

まず、3章の大学生を対象としたアンケート調査からは以下のようなことが分かった。

- ① 聞き手を高める割合は日韓で、それほど差はなかったが、第三者を高める割合は、日本語が11%であるのに対し、韓国語は46%にも及び、日韓で第三者の捉え方に大きな相違点が認められた。
- ② 日韓で最も相違点がみられたのは、「父」に対する敬語使用で、韓国語では「父」が聞き手になっても第三者になっても高めるのが一般的であるのに対し、日本語の場合は聞き手敬語も使われておらず、さらにウチソト意識から、第三者敬語も用いないのが一般的であった。
- ③ 韓国語において最も絶対的に高められると言われている「父」に言及する際、聞き手が同等の場合には、4分の1の人が「父」を高めておらず、これは絶対敬語の相対敬語化として捉えられる。韓国語における「絶対敬語の相対敬語化」は身内に言及する場面から生じつつあると解釈できる。
- ④ 第三者が「指導教官」で、聞き手が「学長」の場合は、日韓共に「ゆれ」が観察された。日本語においては、規範的な敬語法からは第三者敬語を控えるべきであるが、約半数の人が第三者を高めており、聞き手敬語に連動し第三者までも高めるという第三者敬語の聞き手敬語化が証明された。韓国語においても、圧尊法の影響で、第三者敬語を控えるべきであるが、約7割の人が第三者までも高めており、「圧尊法」はほとんど守られておらず、日韓で同じ傾向が読み取れた。

次に、4章の社会人を対象としたアンケート調査からは以下のことが明らかになった。

- ① 荻野値の大小は第三者の違いではなく、聞き手の違いによって左右されることが分かった。これは大学生の結果とも一致する結果である。
- ② 大学生の場合と同様に、日本語の場合は、基本的に聞き手が同等か目下に対しては、第三者敬語がほとんど使われず、全体的に韓国語の方が第三者を高める割合が高い。
- ③ 大学生の場合と同様に、第三者が「父」の場合、聞き手が同等や目下の場合は約30%の人が「父」を高めていなかった。これはすなわち、韓国語は絶対敬語が基調であるが、その中でも親族に対する敬語使用においては韓国語にも相対敬語的な一面があるといえる。
- ④ 韓国語において、圧尊法を守る人は半分程度にすぎず、第三者も聞き手も両方高めてしまう新しい敬語法が使われている。大学生の場合が30%であったのと比べれば、社会人の方がより正しい

敬語法を習得しているといえよう。

- ⑤ 第三者をより高める傾向は、日韓共に男性よりは女性、40～50代よりは20～30代で顕著であった。これは新語・流行語の受容過程にみられる女性・若年層の積極性と相通ずるものだと考えられ、若年層におけるこのような敬語使用は今後の日韓の敬語変化の方向を予測する材料になるものと考えられる。

次に、5章のシナリオ談話に現れた第三者敬語について結果を簡単にまとめる。

- ① 日本語においては、ウチソト意識が働き、第三者が話し手にとって身近な場合は高めないというルールが強いことが確認され、韓国語においては、ウチソト意識はあまり働かないことが再確認された。
- ② 日韓共に「最上敬体」はそれぞれ、0.4%、3.0%とあまり使われていなかった。また、第三者を高める割合はアンケート調査の結果と同様、韓国語の方が顕著に高いことが分かった。
- ③ 第三者敬語と聞き手敬語の呼応関係をみると、日本語の場合は、「最上敬体」や「敬体」と「尊敬語使用」の呼応率が高く、「常体」との呼応率は低いことから、聞き手を高めるほど、第三者も高めているという「第三者敬語の聞き手敬語化」が明らかである。これに対し、韓国語の場合は全体的に、聞き手敬語に関わらず、第三者を一律的に高めており、絶対敬語的な性格を端的にみせていた。
- ④ しかし、絶対敬語が基調である韓国語においても、聞き手が同等の場合は、上位者である第三者を高めない割合が約半分に及び、「絶対敬語の相対敬語化」もみられた。
- ⑤ 韓国語においては、年下の聞き手に対し、正しい敬語を教えようという「教育的配慮」から、より第三者を高めるといふ敬語用法が確認された。
- ⑥ 韓国語において、敬体助詞の使用率は1.4%にすぎず、第三者に対する敬意は主に述部や呼称の変異形 (variation) で表していることが分かった。

次に、6章の日本語の自然談話分析の結果をまとめる。

- ① 全用例のうち、第三者の言及があった用例は2.6%にすぎず、自然談話を材料として、第三者敬語研究を行うことは、あまり効率的ではないことが分かった。これにより、アンケート調査やシナリオ談話分析の有効性も確認された。
- ② フォーマルな場面になるほど、第三者に対する尊敬語使用が多くなり、場面のフォーマルさが大きく影響することが明らかになった。
- ③ 第三者敬語と聞き手敬語の呼応関係をみた結果、敬体を用いる相手に対し、より第三者に対する

尊敬語を多用していることが判明し、「第三者敬語の聞き手敬語化」も証明された。

以上をまとめると、日本語は聞き手が第三者より上位になるほど、第三者敬語が多用されており、これはまさに聞き手の影響で第三者に対する尊敬語が使われることを示しており、「第三者敬語の聞き手敬語化」を端的に表す結果となった。

これに対し、韓国語の場合は、第三者が聞き手より上位であるほど第三者を高め、第三者が聞き手より下位者であるほど第三者を高めないという結果となった。また、韓国語の場合は、第三者が話し手より上位者で、絶対的に高められるべきであるが、聞き手によって、第三者を高める度合いが変わってきており、これはまさに「絶対敬語の相対敬語化」の現象であるといえよう。

このような流れの中では、日本語は聞き手を敬う手段として、より第三者を高める方向へ進むと予想される。また、韓国語の場合も、本研究における一連の考察から、従来の第三者敬語の絶対敬語的な性格が薄れてきて、敬体を用いない親しい聞き手に対する第三者敬語の運用と、敬体を使うべき聞き手に対する第三者敬語の運用が異なってきていることが明らかになった。これは、聞き手への配慮が優先するという、日本語の敬語変化の流れとも一致している。また、このような変化を主導するのは、女性であり、また、若年層の社会人であることも明らかになった。

以上の考察で、言語の違いを越えて、対人敬語の優位という共通性がみられ、しかもその受容過程にも共通性がみられることが、本研究により明らかになった。これは、一般に広く観察される対人機能重視の方向へ進む言語変化の傾向とも無関係ではないと考えられる。本研究は、敬語使用の変化からこの点を実証的に捉えることに成功した好例と言えるだろう。また、本研究のような社会言語学的な対照研究により、日韓において、現在進行中の第三者敬語の敬語運用の変化が、実証的に明らかになった。